

メタ観光研究助成事業（2025 年度）報告論文

地域らしさカルタを用いた多様な地域資源やその価値の関係性の可視化¹

—メタ観光的アプローチによる地域資源の体系的な理解に向けて—

関口達也²

1. はじめに

地域の魅力や価値は、地域内外の人々が地域に存在する多様な資源に触れて感じ取られるものである(関口ら 2025)。特に地域固有の魅力や価値は「地域らしさ」と捉えられ、観光資源にもなり得る。これらの資源は別の資源やその背後にある無形の「コト」を媒介として、何らかの関係性や繋がりを持つこともある。一方で、観光行動の多くは SNS や観光ガイドなど他者由来の断片的な情報に依存しやすく(高岡 2014, 日本交通公社 2022)、観光(地域)資源間関係性の理解には結びつきにくい。ガイドブックや SNS 等で紹介された資源に受け身的に触れて、それらを消費し終えたらその地域への興味が薄れる可能性(堀野 2014)など、観光持続性の面でも課題がある。その課題に対して各自が地域資源の価値・魅力について発掘・理解し、自分なりに地域を楽しむことが重要であると考えられる。本研究ではそのきっかけ作りとして、地域資源を題材にしたカルタに着目する。このような郷土(地域)カルタは全国的に存在し、それらを対象にした研究も複数存在する。これには、地域カルタが地域内で実際に遊ばれることで地域や地域資源の理解を促すことを明らかにしたもの(柳田・村山 2023)、地域カルタの作成経緯・過程やその意義(梅津 2019, 佐藤 2023)、札の内容の特徴について分析したもの(梅津 2019, 番匠谷 2021)がある。しかし、作成された地域カルタの内容をメタ観光的な観点を踏まえて分析し、特に地域資源の相互の繋がり・関係性の可視化を試みた研究や、そこから地域資源の重要性について価値を可視化して評価した研究は見当たらない。

上記の背景のもとで本稿では、筆者らが岐阜県飛騨市で住民・関係人口の方々とのワークショップ(WS)で作成に取り組んでいる「地域らしさカルタ」を題材にする。研究目的は、1)地域資源相互の繋がり・関係性、そしてそこから評価できる各資源の重要性を可視化すること、2)地域らしさカルタが地域内外の人々にとって、地域資源の体系的・能動的な理解促進や動機付けに貢献する可能性について検討を行うことである。

「地域らしさカルタ」は、WS 参加者がまち歩きの中で「地域らしい」と考えた要素を撮影・記録してもらい、その写真を「絵札」、その説明や想いを「読み札」として自由に表現するものである。本研究では、主に絵札・読み札の内容の概観を行ったのち、情報から地域資源に関するキーワードを抽出し、各カルタ札に「タグ」付けを行う。そして、これらのタグのカルタ札間での登場頻度や共起度合いに基づき、地域資源としてのモノ・コトのネットワーク図を作り、資源相互の関係性や各資源の重要性の可視化を試みた。さらに、そこからカルタだけではみえない繋がりを補完して理解するためにどのような補足説明を付与すべきか、という観点からも分析を行った。そして、それらの成果に基づき、住民や関係人口を交えた WS やヒアリングを実施し、研究の今後の発展に向けた意義や課題について整理を行った。

なお、本研究においてメタ観光の考え方を取り入れている点は特に以下の 2 点である。1) カルタの(絵札の)題材となる地域資源の位置情報も記録してもらい、地域空間(地図)上に重ねて分布を確認できるようにした点、2) 観光資源に留まらず、種類や活用状況の異なる多様な地域資源を扱い、既存の観光形態のレイヤーを超えてそれらが共通して有する価値の源泉や資源間関係性の近さや重要性などの相互的な関係を可視化しようとする点。

2. 対象地域と調査概要

対象地域は岐阜県飛騨市とした。飛騨市は、2004 年に古川町・神岡町・河合村・宮川村の 2 町 2 村が合併してできた市である。人口 21,500 人、高齢化率 40.5% (いずれも令和 (R) 7 年時点) で人口減少・高齢化が進行中であり、地域資源の喪失、それらの保全・継承・活用を支える担い手の減少が懸念されている。その様な中で、地域外から様々な関わり方で地域を支える「関係人口」を増やし、住民と関係人口が協働した地域づくりのための多

様な取り組みを行っている。本研究では古川町・神岡町において一連のWSを実施した。これらのエリアは、他の2村と比べて地域内外からのアクセス性が良く、地域拠点（市役所やコミュニティセンター）から歩いて回れる範囲に、各町の特徴を良く表す多種多様な地域資源が点在している。WSの対象となった地域の地図と、そこで得られたカルタの絵札要素となった地域資源の分布図を、図1・図2に示す³。

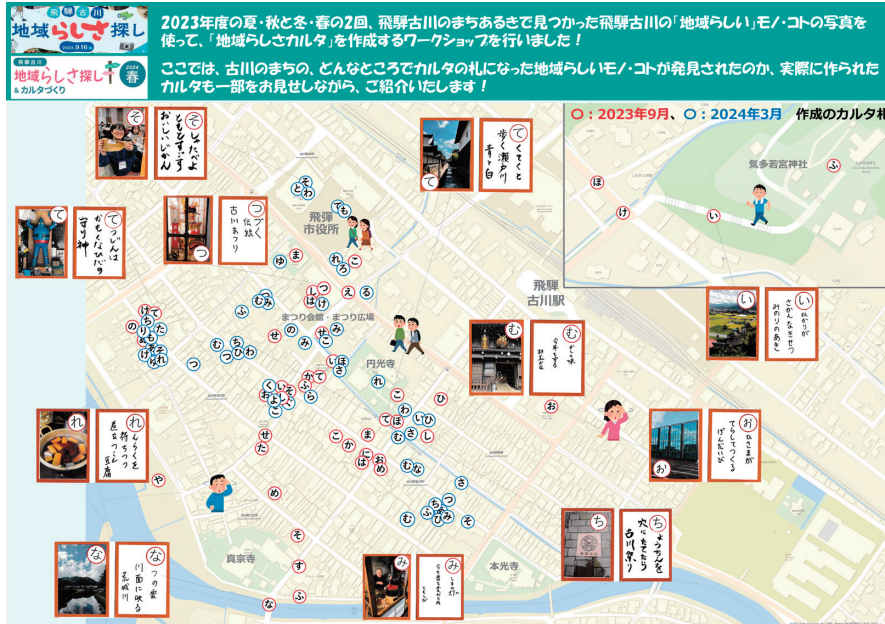


図1：古川町エリアとWSで絵札要素として取り上げられたカルタの分布範囲



図2：神岡町エリアとWSで絵札要素として取り上げられたカルタの分布範囲

筆者らはこの「地域らしさカルタ」づくりWSを4回実施した（古川町：R5年9月16日、R6年3月9日、神岡町：R6年11月23日、R7年11月8日）。本稿では主に、「カルタの内容を踏まえた地域資源に関する定量的分析」と「その方法論を住民・関係人口の方に向けて実践し、地域資源相互の関係性の理解促進に対する貢献可能性や課題を得るための調査」の報告を行う。前者として古川町の2回のWSで作成されたカルタをデータとした分析結果を、後者としてはR7年11月にWS内で実施した関連ワークの結果を中心に報告する。

地域らしさカルタづくりWSの流れは各回で概ね共通であり、参加者には午前中に約2時間まちを自由に歩いてもらい、街の中で見かけた「将来に残したい『地域らしい』まちの要素」の写真の撮影と説明、位置情報、撮影

理由などをスマートフォンアプリ「Epicollect5」⁴で記録してもらった。午後には約2時間をかけて、カルタ作成を以下の流れで行う：①参加者各自が午前中に撮影した中から絵札にしたい写真を5枚ほど選ぶ、②参加者間で写真の紹介、③カルタの作成。カルタの読み札の頭文字のみ各参加者に対して（一定の自由度を残しつつ）運営側から割り当て⁵ており、参加者はこの範囲で読み札を考える。令和7年11月の神岡町のWSのみ、カルタ作成の時間を約1.5時間に留め、その後に後述の「カルタ間の繋がり発見ワーク」を1時間程実施した。また、いずれのWSでも地域や地域資源に対する認識・意識の変化を訊ねる目的でWS前・後にアンケート調査を実施している。

各WSの参加者数と、作成されたカルタの枚数は以下である。参加者数は古川町でのR5年9月の回が15人、R6年3月が19人、神岡町でのR6年11月が8人、R7年11月が10人であった。作成されたカルタの数は、R5年9月が47枚（市内20枚、市外27枚）、R6年3月が63枚（市内16枚、市外47枚）、R6年11月が32枚（市内24枚、市外8枚）、R7年11月が39枚（市内15枚、市外24枚）。各回の参加者の基本属性を表1にまとめた。

表1 各回のWS参加者の基本属性

	R5年9月 古川町	R6年3月 古川町	R6年11月 神岡町	R7年11月 神岡町
性別	男性10/女性4/ 不明・拒否1	男性14/女性3/ 無回答1	男性6/女性2	男性6/女性4
年齢	20代1/30代1/ 40代7/50代2/ 60代3/70代~1 /不明・拒否1	20代3/30代2/ 40代1/50代2/ 60代3/70代~2 /無回答1	20代1/30代1/ 40代2/50代1/ 60代2/70代~1	20代4/30代0/ 40代1/50代2/ 60代1/70代~2
居住地(※)	市内6/市外9	市内5/市外14	市内6/市外2	市内4/市外6

※居住地は、参加申し込み時に各自が飛騨市に申告した住所に基づいて集計した

3. 調査・分析の結果と考察 (1)：カルタを通していかなる地域資源に触れることができるか

3.1 絵札要素の分析

3.1.1 絵札要素の分布

ここでは、古川町での2回のWSで得られたカルタ札110枚を対象に内容分析を行い、カルタを遊んだ場合にいかなる地域資源に触れることができるかを検討する。

まず、絵札で取り上げられた要素に着目した。図3は飛騨市の公式観光サイトで紹介される観光モデルコース22件の情報から地域内の各街路の観光ルートとしての利用されやすさを推定し、その度合いとカルタの絵札の対象要素との位置情報をGIS上で重ねあわせたものである。

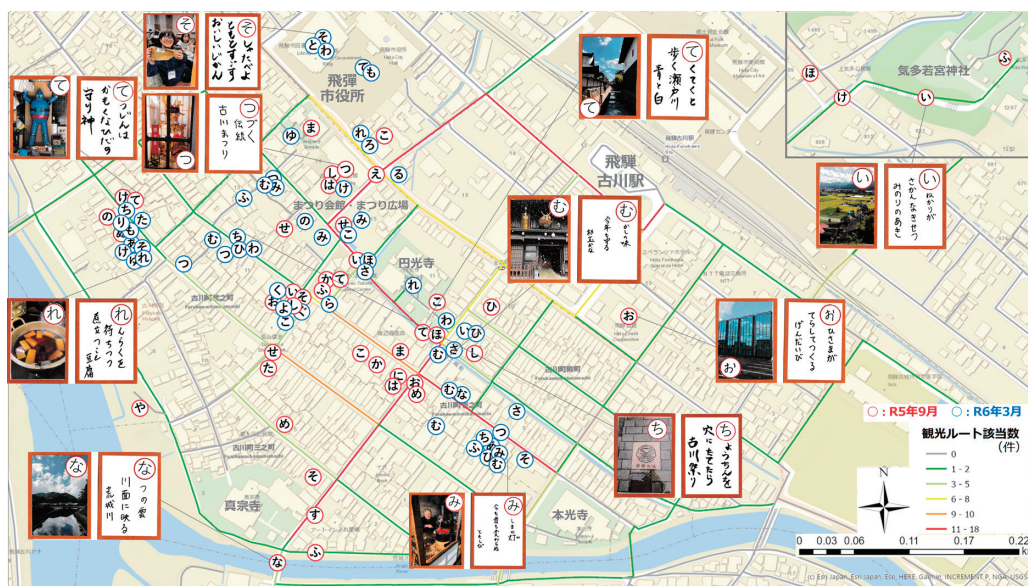


図3：地域の各街路の観光ルートとしての利用されやすさとカルタの絵札要素の分布の関係

絵札要素は観光コースとして使われやすい街路付近を中心に、実施エリア一帯に広くみられた。観光ルートとなりやすい街路沿いには、地域を代表する飛騨古川まつりに関する起こし太鼓や屋台といった展示物や地域の特徴的な瀬戸川と白壁土蔵街のある特徴的な街並みなど、地域の観光スポットになり得るものが多くみられた。また、地域の伝統産業を扱う酒造や和ろうそく店のある通りでも同様に多くの絵札要素が取りあげられた。こちらは、上記のような一部の店を複数の参加者が取り上げていた。このような地域の主要な観光資源が集中しているエリアで、それらの地域資源に「地域らしさ」を感じてカルタでも取り上げたと考えられる。また、地域に古くから存在するもののみならず、ここ10年くらいの間で開店した地域の方や観光客の居場所になり得る店舗なども取り上げられていた。さらに、これら地域の主要な観光資源が集中しているエリアの中にも、既存の観光資源以外で取り上げられた絵札要素も存在し、それらは観光への活用を検討する余地があるといえる。一方で、観光ルートにはなりにくいと推定された観光エリアから少し外れた住民の居住エリア周辺にも絵札要素が確認された。これらの場所では、地域の人に愛される店舗や地域の住宅意匠、街なかのオブジェなどの非観光資源である要素・場所が多かった。これらは、思い出やなじみがある生活の場所や地域の人々の暮らしが現れている点に地域らしさを感じたと考えられる。

3.1.2 絵札要素の分類と作成者ごとの特徴

次に、市内参加者（市内 G、36 枚）・市外参加者（市外 G、74 枚）のそれぞれが作成したカルタ札の絵札要素に着目し、どのような種類の地域資源が取り上げられているのかをみる。絵札要素を既存研究（関口ら 2025）を踏まえて図4に示すような15カテゴリに分類した。集計対象となる絵札要素は撮影対象の写真と読み札の内容から特定し、一つの絵札で複数の対象を集計している場合がある。図4に市内 G・市外 G が各カテゴリの要素を取り上げた割合をまとめた。

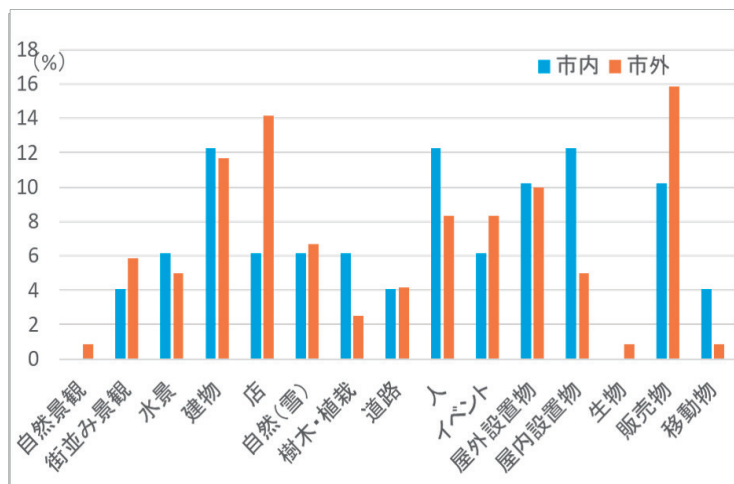


図4 絵札要素のカテゴリ割合の市内 G・市外 G 間での比較

市外 G では【店】や【販売物】など一般的な観光ガイド・サイトに載るものが多く取り上げられる一方、市内 G では【人】や【屋内設置物】など、観光ガイド・サイトでは紹介されづらく、要素と地域との関係や、その場所を知らないと感じづらなものを含むカテゴリの撮影が多かった。また、市外 G の方がカテゴリごとの撮影数の差が全体的に大きいのに対し市内 G の方が差は小さく、市内 G は相対的に様々なカテゴリの地域資源についてバランス良く撮影したといえる。これも、地域の中で生活をし、地域の歴史や文化、身近に存在する地域のことを知っている市内 G の方が地域らしさに繋がる地域資源の存在をよく理解していることが影響していると考えられる。

3.2 カルタ札の情報に基づく地域資源どうしの関係性の分析

本節では、この地域らしさカルタの絵札・読み札の情報から、地域資源どうしの関係性に触れることが出来るか、また、カルタ札からの情報のみでは十分に地域資源どうしの関係性に触れづらい場合には、実際に地域で遊ば

れる際にカルタ情報を補足する札の説明文をどのように付けることが効果的かを検討するための分析を行う。

3.2.1 分析の前準備：地域資源に関する「タグ」の付与

その分析のために、カルタの絵札・読み札から作成者が取り上げようとしたと考えられ、読み取ることの出来る地域資源（ハード要素のみならず、ソフト要素も含む。また、その資源が見られる施設等の場所自体が地域資源である場合はそれも含めた）についてキーワード抽出（以下、「タグ（付け）」と表記）を行い、各カルタに紐づくタグとして扱った。例えば、絵札に「まつり会館」という施設で撮られたことがわかる祭りの「屋台」が写っており、読み札で「古川まつり」という祭事で使われることが言及されている場合は「まつり会館」・「古川まつり」・「屋台」のタグを付与するということである（参考例が図5）。これらを「札由来のタグ」とする。なお、このタグの名称設定は、飛騨市の公式観光サイト内で言及されている記載を参考に設定した。また、絵札要素そのものが必ずしも観光サイトで紹介されている地域資源ではない場合もあるが、他の地域資源との関係を分析する際のことを想定して、その場合も筆者らで名称設定を行いタグを付与した。



※ 図中の番号は、カルタのどの部分を根拠に各タグが付与できるかを示したものである

図5 カルタ札の情報から「タグ付け」を行った例

3.2.2 カルタの絵札・読み札から読み取れる地域資源タグの分類とその特徴分析

まず、古川町のWSで作成された110枚のカルタに対して、126種類・240件のタグが付けられた。カルタ札を作成者が市内G/市外Gであるかに分けて1枚当たりのカルタ札に付与されるタグの種類・数をみると、市内Gでは平均して1.8種類・2.5件、市外Gでは1.2種類、1.7件と、市内Gのカルタ札の方が種類・数ともに多かった。表2に、市内G/市外Gの頻出タグを上位10位までまとめた。古川まつりや瀬戸川、酒、和ろうそく店など、地域の主要な資源に関するものが上位に来ていることは共通しているが、市外Gでは、観光ガイドやメディア等で取り上げられやすい主要な観光資源が取り上げられやすいのに対して、市内Gでは、それよりもややマイナーな地域行事や、地域の人々に愛される食堂、また地域内で見られるオブジェ等へのタグも多く、先に絵札要素の分析で見た結果と類似する傾向が見られた。

表2 市内G・市外Gでの各タグの登場頻度（それぞれ上位10位まで）

グループ	頻出タグとその登場回数（タグの後ろの数字が登場回数）
市内G	雪 5(回) / 古川まつり 4 / 瀬戸川 3 / 味処古川 3 / 鮎 2 / 和ろうそく 2 / きつね火祭り 2 / きつね火祭りの看板 2 / 鉄人28号の像（※住民の方が自作したオブジェ） 2 / ひな人形（※地域拠点施設内に展示されている古布を利用したハンドメイド） 2
市外G	雪 8(回) / 瀬戸川 5 / 三嶋和ろうそく店 4 / おかずや山本 3 / おかずや山本の商品 3 / 古川まつり 3 / 三嶋順二氏(※三嶋和ろうそく店 店主) 3 / 酒 3 / 和ろうそく 3 / 気多若宮神社 2

次に、これらのタグが絵札・読み札のいずれに由来するかを整理し、環境省(2015)の地域資源の分類を参考にしつつ16種類に分類して、「その他」と「非分類対象」カテゴリ以外⁶の出現割合を市内G/市外G別にまとめたものが図6である。

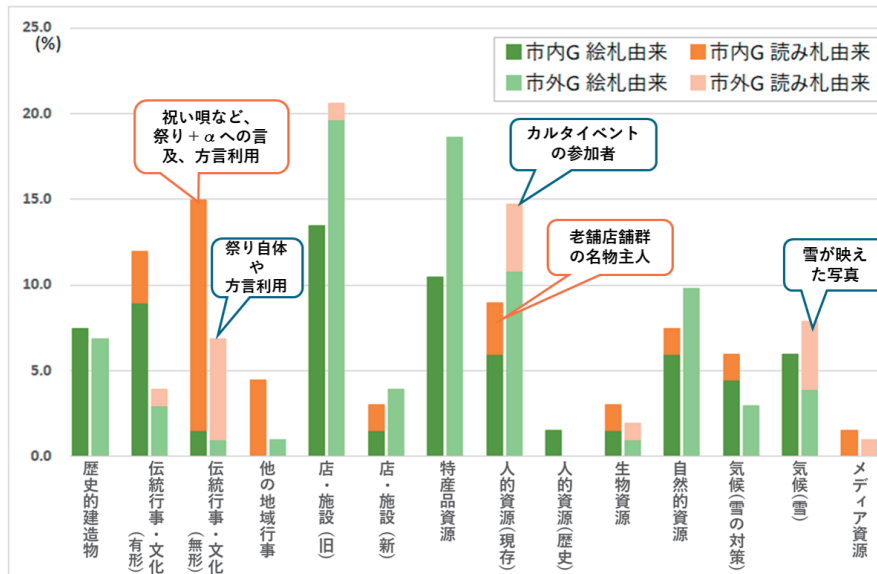


図6 絵札・読み札から取得できたタグのカテゴリごとの出現割合 (市内G・市外G)

このグラフの結果に加え、一枚のカルタ札の中で異なるカテゴリのタグが付いた札の割合が市内Gで61.1%、市外Gで37.8%であったこと、読み札の記述内容の特徴として市内Gは読み札の中で絵札要素と関係する別の資源への言及も多く、市外Gでは絵札の(状況)説明・印象が中心であったこと、さらに3.1節での分析結果を踏まえると、以下のことがいえる。まず、地域資源間の繋がりを学ぶには、市内Gの参加者が作ったカルタ札が有効である。絵札のみならず、読み札の内容からも、絵札要素に関連する別の地域資源について学ぶことが出来る。一方で、市内Gのカルタ札は、前述の分析から、ややマイナーな地域資源が取り上げられることも多いため、新しく地域に関わる関係人口や観光客の様な人が地域資源について学ぶには、市外Gが作成したような「わかりやすい」カルタも取り入れることで、主要な地域資源から理解をスタートさせつつも、地域のマイナーだが重要な地域資源にまで触れていくことが出来ると考えられる。また、市外Gのカルタは、カルタ札のみで知る事のできる地域資源は相対的に少ないが、カルタ札に対する解説文などを適切に設定してあげれば、市内群のカルタ同様に地域資源間の繋がりについて理解を深めることができる可能性がある。また、市内群のカルタも、地域資源間の関係性を一定程度把握することはできるものの、それが地域資源に関する関係性の説明には十分でない可能性がある。そのような課題を踏まえ次章では、この部分に関して検討を行う事とする。

4. 調査・分析の結果と考察 (2) : 地域らしさカルタから把握できる地域資源の関係性は十分なものであるか

4.1 分析の前準備 : 公式観光サイトから取得した地域資源に関する追加タグの付与

本章では、前章の最後で述べた課題について検討するため、まず、各カルタに「(地域資源に関する)追加タグ」の付与を行った。これは、(カルタ作成者の知識不足や読み札は20文字程度の短文である等の理由で)カルタでは言及されていないが、本来であればそのカルタに関して付与されているべき地域資源タグがあると考え、3.2で扱ったカルタ札由来のタグと区別する形で各カルタに付与した。今回は試験的な試みと位置づけて、飛騨市公式観光サイトの各地域資源の紹介記事の内容を踏まえて、この追加タグを設定した。各カルタの絵札要素・撮影場所の名称を飛騨市公式観光サイトで検索し、当該要素・場所に対する紹介記事がある場合、その記事の記載内容から、当該要素との関係について言及されている地域資源(ハード・ソフトの両方)を「追加タグ」として付与することとした。飛騨市の観光サイトは、観光資源を中心に地域資源に関する紹介記事が数・質ともに充実しているため、単一のサイトでの参照でも一定の地域資源タグを付与できた(追加タグで271種類、先の地域資源タグと合わせて397種類)。カルタ由来のタグと追加タグの付与の例を図7に示す。

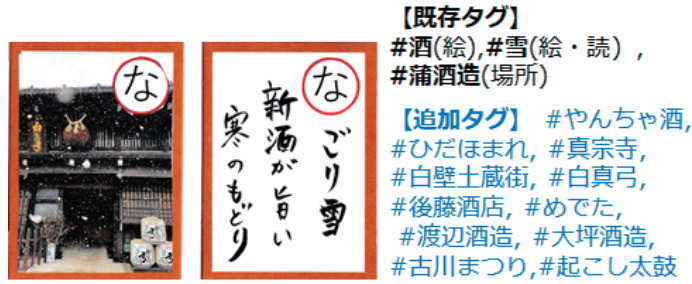


図7 カルタ札由来のタグと追加タグのそれぞれを付与した例

4.2 地域資源どうしの関係性の可視化

次に、このように付与した地域資源タグを用いた場合、地域資源間の関係を十分に把握できるのかを確認するため、コレスポネンス分析を用いて、地域資源タグ間の関連の近さの可視化を行った。分析対象はカルタ全体で2回以上登場したタグで、それらのタグが単一のカルタ札の中に2つ以上同時に付与されたカルタ札とした(分析対象タグ:63件、カルタ札:80枚)。図8にコレスポネンス分析⁷⁾の結果を示す。

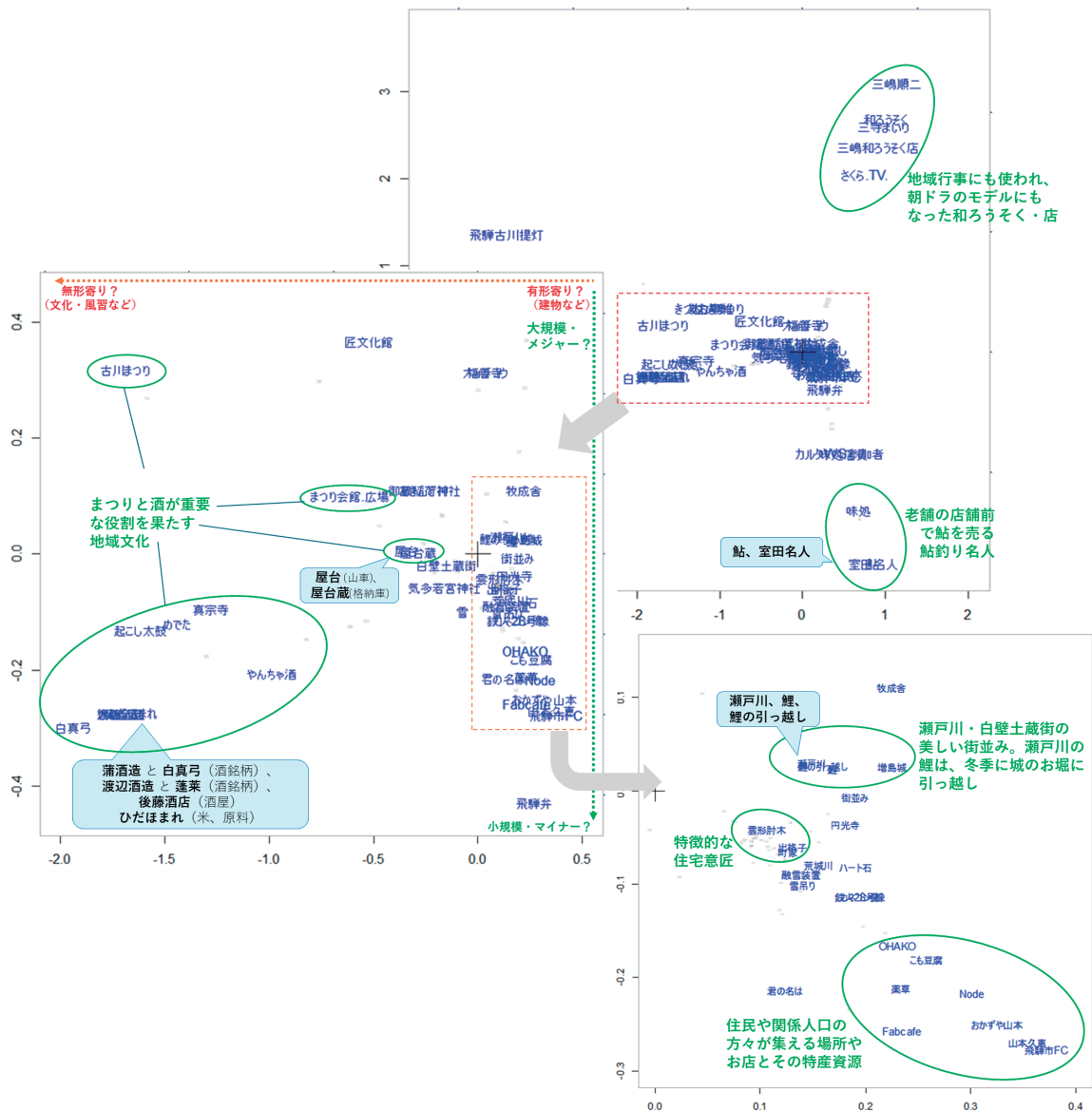


図8 分析対象のタグのコレスポネンス分析の結果

図には特に主要な地域資源どうしの関係に一部コメントを追記して示しているが、同じ角度で写真に写っているという「空間的に近い」だけでなく、祭りに関わる地域資源や、瀬戸川のシンボルの鯉の城跡への引っ越しなど、空間的には必ずしも近いものではないが「意味的に近い」地域資源の関係が近くに配置されており、そのような地域資源間の関係も可視化できた。ここから、カルタ札由来の地域資源タグと観光サイト由来の追加タグを組み合わせることで、対象地域の地域資源どうしの関係を、概ね適切に捉えられているといえる。

これらのタグの利用の妥当性が確認できたところで、次により詳細な地域資源どうしの関係性の分析を行った。これには、ネットワーク分析における中心性指標とネットワーク図を用いる。先のコレスポネンス分析ではそれぞれのタグが同時に一つのカルタに含まれているかどうかを分析指標としたが、こちらの分析では地域資源タグどうしに明確な関係性(つながり)があるかどうかを指標とする。そのため、同一のカルタ札に付与されたタグであっても、タグどうしの関係性として繋がりが無いと判断できるなら、そこには繋がりを与えない点で異なる。今回、全てのカルタの全てのタグどうしのペア相互の関係性(397種類の78606ペア)をすべて調査しきめることは期間内には困難であったこと、また、出力結果も非常に煩雑になることから、方法の有用性を明快に表現して示せるよう、以下の図9に示した5枚のカルタ札とそれらに付与されたタグを用いてネットワーク図を書いた結果を図9に示す。なお、得られた地域資源間のネットワーク図は、追加タグまで含めて描画したため、ここで示されている全体の繋がり(ネットワーク)はこれらのカルタにある地域資源について「観光サイトの関連情報を十分に確認した際に理解できる繋がりを」表している。それらと、(この5枚/残りのカルタまで用いた時のそれぞれでの)カルタ札由来のタグ情報で理解できる繋がりを区別するため、一部ネットワーク図にそれらを区別するための加工をして表示している。

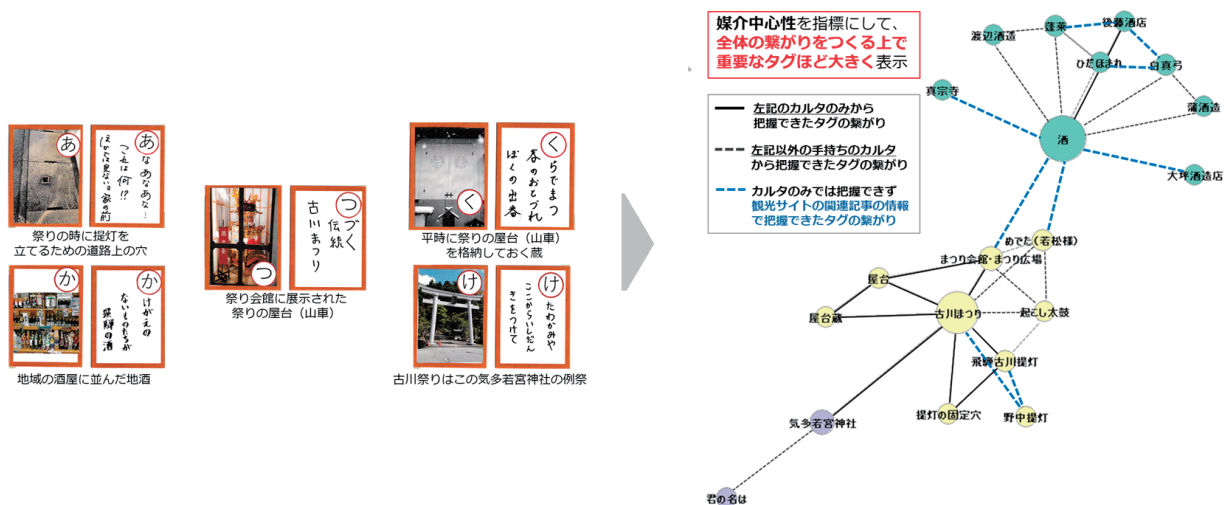


図9 カルタ札に関連するネットワーク図の構築と各繋がりのカルタの情報からの説明の可否の可視化

この様に、タグを用いて地域資源間の繋がりをネットワークとして可視化することで、地域の中でいかなる地域資源が地域資源どうしを繋ぐ媒介(ハブ)として重要な役割をしているかということ、さらにそのタグどうしの繋がりがカルタ札から把握できるものかどうかを区別しておくことにより、一連のカルタを遊ぶだけでどの程度の繋がりまでを理解できるのか、一方でそれだけでは理解できない繋がりはどれか、ということを視覚的に理解できるようになるといえる。観光サイトの関連記事から読み取れることと同等の地域資源間の繋がりを理解するためには、図中の青点線で示した箇所の繋がり・関係性に関する説明文を付与するとよいということになる。本章で示した方法により地域資源間の関係性を視覚化することで、これまで定性的に扱われることが多く、様々な資料を熟読しないと理解のしづらかった地域資源の重要性や資源相互の関係性を客観的かつ視覚的にわかりやすい方法で把握し、かつ地域らしきカルタ(+その簡単な解説・説明文)でそれを効果的に理解することが可能である

ことを示すものであり、本研究の一つの到達点として重要な成果であるといえる。

5. 調査・分析の結果と考察 (3) : 神岡町でのワークショップによる実践と参加者へのヒアリングからみた地域資源の繋がり図を作成することの可能性・意義・課題

4章で提案した地域資源相互の関係性の把握方法について、1)地域住民や関係人口の方が理解を示してもらえるか、2)住民や関係人口の方々でも今回の提案方法に基づいて地域資源間の繋がりを考えることができるか、3) その様な地域資源間の繋がりに触れることで、各自の能動的な地域理解やそのための行動を促すことができるか、を検討するために、追加的にWSとヒアリングを行った。

WSは、古川町の結果と他地域との地域資源の繋がりの発見の期待を込めて、古川町に隣接する神岡町(会場:神岡町コミュニティセンター)で実施した(参加者情報は2章の表1を参照)。WSはこれまでのカルタ作りWS同様、午前中にまち歩き、午後にカルタ作りを同様に行ったが、カルタ作りのワークの時間を短縮して「地域資源の繋がり発見ワーク」を続けて実施した。このワークは、各自が当日に作ったカルタに加えて、これまでに古川町で作成されたカルタ10枚程度を運営側で抜粋して補助的に用いて、カルタ札(で扱った地域資源)どうしに係性を考え・発見する目的がある。このWSでは参加者を2グループに分けたうえで、まち歩きの時点から「グループ内で協力し合って繋がりのある地域資源を探してもらおう」ことを意識して臨んでもらった。

まず、この「地域資源の繋がり発見ワーク」の実施方法について述べる。参加者が作成した各カルタに対して、作成者と同グループの参加者で協力して各カルタの絵札や読み札の情報を踏まえて「タグ付け」を行ってポストイットでカルタ札に貼ってもらった。この際、「カルタの絵札読み札そのものから付与できるタグ」(黄色)と「グループ内のメンバーからの情報提供やインターネット等での検索により、カルタ札にある情報以外から付けられるタグ」(青色)は異なる色のタグとした。また、参加者からカルタの絵札要素に対する「感情・想い」をタグ付けしたいという要望があったため、それもまた異なる色(桃色)でタグ付けしてもらった。また、その後に関係があるカルタもしくはタグどうしを糸でつないでもらう形で、模造紙上に「カルタ・タグの繋がり図」を作成してもらった。以下の写真1・2に各グループの作成した繋がり図を示す。



写真1・2 各グループで作成されたカルタ・付与されたタグとその繋がり図の様子

以下、ワークの過程の観察や結果を通して筆者が得られた気づき・課題についてまとめる。各グループで共通していた点として、今回のワークでは、カルタ札へのタグ付けは十分に行えたといえる。筆者が当初想定していなかったような作成者や受け手の「感情・気持ち」に関するタグも多く付与されていた。一方で、グループ内で複数人がカルタのタグ付けを行う事もあり、類似・同一の要素に対しても共通したタグが付与されにくいという課題があった。そのため、本稿の4章で提案したような共通するタグどうしを直接つなげるという操作ではなく、各カルタに付与されたタグを一度抽象化してそこに共通点を見出したうえで(例:「水」に関するもの、「暮らし」に関するものなど、以下「抽象化タグ」)、該当するタグが付いているカルタどうしを繋げる、という操作が大半であっ

た。これは、4章で提案した手順と比べた場合、各カルタに付与できる地域資源タグを網羅的に列挙・確認・整理してリスト化したうえで、それぞれに合うタグ名称をリストから設定するという様な手順が短時間では難しかったことや、あらかじめ指示をしないと、グループ内で同一の対象に同一のタグを付与する、という発想に至りにくかったことなどが理由であると考えられる。一方で、上記の様にやや大きい括りでの捉え方であれば、カルタの絵札や読み札の情報から地域資源間の繋がりについて WS 参加者に考えてもらい、理解してもらうことは十分に可能であったといえる。さらに片方のグループでは、同一の抽象化タグのもとで神岡町と古川町の地域資源の繋がりを見つけていた例もあるため、カルタに関連するタグ付けを経て地域資源の繋がりを検討・可視化することで、地域内に留まらず地域間の地域資源間の繋がり気づききっかけにもなりやすかったと考えられる。

また、WSを通して地域資源間の繋がり考えたことの意義を示す結果として、WS後のアンケートの結果を集計してみると、(一連のカルタ作りWSの参加前と比較して)「Q1:地域に点在する様々な地域資源どうしの関係性(つながりに)に対して興味をもつことが出来たか?」という問いに対しては10人中9人が興味を持てたと回答し、「Q2-1 地域に点在する様々な地域資源どうしの関係性(つながりに)を実感出来たか?」という問いに対しては10人中6人が「できた」、4人が「ややできた」であり、「Q2-2 どのような場面でそれを実感したか?(複数回答可)」の問いには、10人中6人が「地域資源の繋がり発見ワーク」を挙げていたことから、本稿で行った方法論に基づき行ったこのワークは、研究者以外の一般の住民や関係人口の人々に対しても、地域資源どうしの関係性を理解してもらうために一定の有効性があったことを示唆しているといえる。

また、このWS後にアンケートを通して承諾が得られた6名(表3)に対して、後日に追加のヒアリング(1時間程度、オンライン通話での半構造化インタビュー形式)を実施した(2025年12月1~6日に実施)。

表3 ヒアリング対象者の属性

分類	対象者	プロフィール
居住経験ありの(元)住民	A氏	男性、70歳代。飛騨市古川町に居住。地域外の来街者への街歩きガイドを定期的に担当。
	B氏	女性、40歳代。約5年前に飛騨古川町へ移住し、2025年秋に高山市に移転。
比較的密に関わる関係人口	C氏	男性、60歳代。千葉県に居住。飛騨市への居住歴はなし。飛騨市へは年に数回程度の訪問頻度。
	D氏	男性、60歳代。富山県に居住。飛騨市への居住歴はなし。飛騨市へは月1回程度の訪問頻度。
関係人口に成りたて	E氏	女性、20歳代。山口県に居住。飛騨市への居住歴はなし。R7年11月のWSで飛騨市へ初来訪。
	F氏	女性、20歳代。山口県に居住。飛騨市への居住歴はなし。R7年11月のWSで飛騨市へ初来訪。

ここではヒアリングの中で各自が「地域資源をきっかけに地域の理解を深めていったきっかけや過程」に関する質問への回答を抜粋する。関係人口の方からはそれぞれ、「ある地域資源について知ると、別の地域資源との関係性(例:歴史の繋がりなど)が気になってくる。その疑問が解決すると、新たな疑問がさらに浮かぶ。その繰り返しで飛騨古川の街の理解が進み、面白くなって、他の場所に行きたくなる」(D氏)というものや「ある地域資源をきっかけに、街の各要素とのストーリーを考えて、その答え合わせをするために、まちを訪れたり調べものをしたりする」(C氏)という趣旨の発言があり、本研究のねらいと整合する回答が得られた。また、自身が街歩きガイドをされている地域住民のA氏からは「(ガイドの)お客さんが自分自身で(まちや地域資源に対して)謎を見つけてもらう。説明の中ではヒントまで与えて、あとはお客さんに考えてもらう。その結果、謎が謎のままで終わってもよい。それが(お客さんの)また(地域に謎を解きに)来てみたいという気持ちに繋がる」という趣旨の発言もあった。ヒアリング対象者が限定的であるため、一般化された結論とまでは現時点では言い切れないもの、これらの発言を踏まれば、本稿冒頭でも述べた様に、本研究が提案するような地域資源どうしの繋がり整理・可視化したうえで、それを踏まえて、地域でそれぞれの地域資源に実際に触れる中でそれらに共通する要素を発見したり、各地域資源間の繋がりやその繋がり形成している要素・観点について考えを巡らせたりすることは、本稿の冒頭で述べた「(観光者が)各自が地域資源の価値・魅力について発掘・理解し、自分なりに地域を楽しむこと」を促すものになるといえる。この様に自分なりに地域を楽しむきっかけを得たり地域資源に関して理解を

深めていく過程の中で、地域に対する興味や愛着等の気持ちが醸成されていく可能性もあり、地域外から来訪する人々を、単なる観光客の立場から、地域外に居住しながらもその地域を支えたり実際に訪れて地域作りに参加するような関係人口への立場へと昇華させていく可能性も有しているといえる。飛騨市の様に関係人口に着目した地域作りを注力している地域では、そのように関係人口を増やしていくことも重要であると考えられ、本研究で題材とした「地域らしさカルタ」は人々の地域に対する理解・見方を深め、次の次元へ昇華させていくためのツールとして、十分な活用可能性を有するものであることを示しているといえよう。

6. 研究のまとめと今後の課題

本研究では、岐阜県飛騨市を対象に、「地域らしさカルタ」を作成する WS を行い、そこから得られたデータ・情報を用いて、地域資源資源相互の関係性を可視化することを試みた。定性的な議論に終始しやすいテーマ・検討内容に対して、一連の分析や提案の方法論の構築の各所において、メタ観光における考え方を取り入れながら、客観的な評価に基づく研究を行った点に特徴があるといえる。

本稿前半のカルタの内容分析を踏まえれば、カルタそのものの情報のみでは一部不十分な点もあるものの、カルタのみでも一定程度の域資源間の関係性の理解を、さらにそこに適切な札の解説文を作成することで（市の公式観光サイトと同等程度の）地域資源間関係性の理解を促せる可能性があることが示された。また、地域資源間の繋がりを可視化する過程で、現状のカルタの情報ではどのような地域資源の繋がりを解説・説明として付けるべきかということも把握できた。また、後半の神岡町の WS では前半の調査分析の成果を踏まえて、地域内外の人々にその方法論を体験・実践してもらい、WS 参加者から（ヒアリングの結果もあわせて）フィードバックに相当するものを得ることができたといえる。WS 参加者の方々の検討プロセスに触れる中で、今回の方法を現場で活用する際の可能性や課題も整理できた。また、WS 後のアンケートやヒアリングの結果は、本研究の意義や方法論が、今後の観光や地域づくりの在り方を検討していくうえで、有益な示唆を提示するものであるということも明らかにできた。

今後の課題としては、以下が挙げられる。まず、想定以上に各カルタに付与される地域資源タグがあり、それらの組み合わせで構成されるネットワーク図の全体像までは作成することが出来なかった（そのため、ウェブ公開で地域住民や関係人口の方からのフィードバックを得るところまで達成できず、5章の様な WS・ヒアリングでフィードバックを得る形をとった）。今後は、この点をまず精力的に進めていきたい。

また、今回提示した方法論の今後の展開可能性を探っていきたい。例えば、5章での示唆が得られたように、地域資源の関係性は地域内に留まるものではなく、他地域との関連性も持ちうる可能性がある。古川町と神岡町のカルタ札の関係性を分析することで、地域どうしを繋ぐ共通性のある地域資源（タグ）を発見したい。また、今回はカルタからは把握できない地域資源間の情報を市の公式観光サイトから取得したが、この情報収集に関する資料の適切性についても今後検討を進めたい。観光サイト由来の情報はどうしても観光に活用可能な地域資源やその関係性に焦点があたりやすい。郷土資料や地域住民からの提供などの情報収集により、観光サイトのみでは得られない地域資源間関係性の発見・拡張が可能になるといえる。その様な課題を克服しながら、観光・地域作りにおいて本研究の成果の活用につながるような発信をしていきたい。

謝辞

本論考は一般社団法人メタ観光推進機構 メタ観光助成を活用した研究成果である。また、東京大学空間情報科学研究センターとの共同研究（No.1471）の成果の一部でもある。また、一連の WS の実施にあたっては、飛騨市役所 総合政策課をはじめとする飛騨市役所の職員の方々に多大な協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

補註

- 1 本研究の一部の内容は助成決定後に以下で発表を行った。1) 立石直登, 関口達也(2025)「「地域らしさカルタ」作りにも地域内外の参加者の視点や意識の比較」, 地域活性学会第17回研究大会研究発表予稿集, pp. 55-58, 2)関口達也, 立石直登, 杉野弘明, 田路達也(2025)「「地域らしさカルタ」の作成の試みとその内容からみた地域資源の特徴や関係性」, CSIS DAYS 2024 研究アブストラクト集, D04 (ポスター発表あり)
- 2 京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 環境科学専攻。博士(工学)。
- 3 図1・図2ともに、R7年5月に飛騨市で実施された『飛騨発つながりづくりシンポジウム』において展示を行ったパネルを掲載した。
- 4 Imperial College Londonにより開発されたツールである。ウェブ上で調査フォームを作成しておく、利用者はアプリを通してフォームをスマートフォンに取り込み利用できる。写真の撮影や位置情報の記録には、各自のスマートフォン内蔵のカメラ・GPSが利用される。
- 5 参加者各自には、カルタの頭文字のひらがなとして、母音部分が極力異なるようにした(一部重複あり)5文字と、自由に頭文字を設定できる「白紙」1枚の計6字分を配布した。この頭文字の割り当ては、対象物の名称を安易に頭文字にせず、読み札の内容を吟味してもらいたいがある。
- 6 非分類対象は、絵札の対象要素ではあるものの、対象そのものに関して他地域にもありふれて存在する一般的な事物を指すと考えられ(例:インテリア、街並み、看板、田園など)、観光サイト内でも紹介記事が立てられていないものが該当する。非分類対象は市内G・市外Gともに絵札要素の約3割を占めたが、これとその他を除いたそれ以外の地域資源カテゴリのタグの割合の差を明快に示せるようにグラフには含めていない。なお、その他カテゴリはカルタ由来の全タグ数のうち約8.3%であった。
- 7 非分類対象コレスポネン分析とネットワーク図の作成は、R言語を用いて行った。コレスポネン分析の寄与率は、第1成分12.24%、第2成分が11.18%であった。

参考文献

- ・梅津頭一郎(2019)「宮崎における21世紀型地域アイデンティティの構築 -ひむかかるとの取り組みから見えてきたもの-」, 宮崎公立大学人文学部紀要, **27**(1), pp. 27-44
- ・環境省(2015)「平成27年版 環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」, <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h27/index.html>, 2026年2月18日閲覧
- ・佐藤高司(2023)「『ぐんま方言かるたII』制作の過程と課題」, 共愛学園前橋国際大学論集, **23**, pp.1-12
- ・関口達也, 田路 達也, 杉野 弘明(2025)「まちの地域らしさの構成要素の特徴とその認識形成に関する研究 - 飛騨古川地域におけるまちあるきイベントの事例に基づいて-」, 地域活性研究, **23**, pp.81-90
- ・高岡文章 (2014)「観光とメディアとルート -ルート観光論へ向けて-」, 観光学評論, 2014年 **2**(1), pp. 29-41
- ・日本交通公社(2022)「国内旅行における SNS・写真に対する意識/実態 -JTBF 旅行実態調査トピックス-」, https://www.jtb.or.jp/wp-content/uploads/2026/01/sns_pictures_report_JTBF220728-2.pdf, 2026年2月18日閲覧
- ・堀野正人(2014)「記号としての観光対象(アトラクション) -D. マキアーネルの所説に照らして-」, 観光学評論, **2**(1), pp. 3-13
- ・柳田咲耶, 村山朝子(2023)「小学校社会科における学習教材「地域かるた」の開発と活用 -茨城県笠間市を対象-」, 茨城大学教育実践研究, **42**, pp.235-248